人生の転換期

明治42年（1909）夫勘七は、57才で石灰の山を息子に譲り、隠居(※13)することとなりました。

しかし、まだ40才にもなっていなかったナヲは隠居生活に満足することができませんでした。

その頃、蓼沼本家では、将来性のある一族の者20人くらいに育英資金(※14)を出して学校に行かせていたのです。

それで、ナヲは上野の美術学校(※15)が女子を入学させるという話を聞き、行かせてもらいたいと頼みましたが「もう40才になるし、子どももいる。女に学問はいらない」と言われ、泣く泣くあきらめました。

※13　隠居
　第一線から退くこと
※14　育英資金
　主に経済的な理由により進学ができない人に出す奨学金
※15　上野の美術大学
　東京芸術学校。現在の東京芸術大学の前身

しかし、まだ隠居(いんきょ)などしたくないと考えたナヲは兄と弟のいる留萌で思い切り絵を描(か)きたいと思い、子どもたちを連(つ)れて佐野(さの)をあとにしました。

子どもたちを連(つ)れた汽車の旅は大変(たいへん)なものでしたが、列車の堅(かた)い座席(ざせき)にゆられながら、これから向かう留萌の町を想像(そうぞう)するナヲ一家でした。

ナヲの兄　日下部主計(くさかべかずえ)